

研究論文

児童館職員を対象とした向社会的行動に関する意識調査

藤 重 育 子

1. 問題と目的

保育者養成学生が保育の専門的資質を身に付け、それらを高めるために在学中における実技演習などの学習や保育実習の効果について、これまでいくつか検討されてきた。その中で、学習や実習によるところの保育士としての資質向上には、かなりの個人差が存在することが明らかになっている。その原因については、現在の学生の能力や性格、志向性（教育や児童福祉など）と、自己の被養育体験、家庭環境、交友関係、社会的状況など出生してからの諸々の経験など多岐にわたるであろう。そこで大日方・藤重（2017）は、保育者養成学生の資質として比較的強い関連性が推測され、かつ客観的に把握される要因として、他者に対する援助について、それを行うことへの態度としての気持ちを測るために学生個人のボランティア志向性と、これまでにそのような援助を実際にどの程度行ってきたかという向社会的行動に絞り検討した。その結果として、保育者養成学生は一般学生よりもボランティア志向性や向社会的行動が強いことが認められた。また保育者養成学生におけるその傾向は、男性より女性のほうがやや強く、一方で一般学生の場合は逆に、女性より男性のほうがやや強いという傾向が見られた。このような保育者養成学生の心理的特性は、将来就職すると考えられる保育という職種にとって望ましい資質であると思われた。

これまで、そうしたボランティアや向社会的行動に関して、一般的な大学生を対象に行った研究では、岡鼻（2013）が、自発的なボランティア活動の経験は、そうでない活動経験よりもボランティア活動への理解を促し、肯定的なボランティアイメージを形成することを報告している。また、大学時代以前のボランティア体験や学習が、大学生になってからどのように影響しているかについての研究も散見され、荒川ら（2006）によると、小・中・高校時代におけるボランティア活動体験は、大学入学後のボランティア活動参加に結びつきにくいという。その主な理由として、高校までの体験は教師から推奨されたものであり、参加の意義づけも薄弱で自発的でないため、本来の社会的貢献を前提としたボランティアとは言えないことを挙げている。しかしながら、小・中・高校において授業の一環として何らかのボランティア活動を経験した大学生は、経験しなかった大学生よりも援助規範意識得点が高かったことについて、高校までの教育において「このような行動が正しい」と教えられた効果であろうと考察されている。また荒川ら（2008）によれば、中学校在学中に「総合的な学習の時間」が本格的に導入された生徒たちが大学生になってから実施されたボランティア活動についての意識調査において、60%以上の大学生が「困っている人に余剰品を譲渡すること」や「困っている人を助けること」などの、いわば「小さな親切行

動」もボランティア活動と捉えていることが明らかにされた。

次に、向社会的行動と友人関係・自己像との関連についての太田ら（2012）の研究によれば、男性では援助意識が向社会的行動を促進し、女性では対人スキルが向社会的行動を促す傾向が認められることや、男性では他者への援助規範意識と向社会的行動が相互に促進しあい、女性では自己の確立が援助意識を育むことが明らかにされていた。また谷田（2015）は、大学生の地域社会への責任性と共感性、向社会的行動の関連を調べたところ、他者との共有体験（共感性）が多いほど責任性が強くなること、問題を他者と共に感じ、何かを分けあい、成果を分かちあって喜び合い、感謝しあう体験（共感的な向社会的行動）が多いほど責任性が強くなることを報告している。さらに大学生における家族関係と向社会的行動の関連（井手ら，2015）について、親子関係と向社会的行動の間には正の相関が認められ、子どもは自分の援助行動が親に認められ支持されていると認知すれば、そのような向社会的行動を繰り返し行うようになると考察されている。また家族機能と援助規範意識の間にも正の相関が認められ、家族間の情緒的繋がりがうまく機能している家庭においては、日常生活でお互いに何気なく行っている気遣いや配慮が、子どもの向社会的行動を増進していることが示唆されている。

以上から見られるように、一般的に大学生までを対象としたボランティアや向社会的行動に関する研究は、これまでも多く手に取ることができ、対象者の傾向をうかがい知ることが可能であった。しかしながら、そうした大学生が就職した後の社会人を対象としての同調査についてはあまり見られない。おそらく学生時代と比較すると、経験値も高くなり、異なる結果が得られるだろう。また筆者の前研究である一般学生と保育者養成学生との比較検討において、心理的相違を把握できたことから、今回は、保育や福祉に携わる人物を対象者として絞り、調査を実施することとした。あらゆる子どもたちが健やかに育つ環境づくりを専門としている児童館職員に焦点を当てて調査を試みるにあたり、背景として以下のことが考えられる。児童館の機能が地域の子どものために遊びをはじめとした様々な体験の機会を提供することや、日常生活における子どもと保護者への子育て支援などが職員の業務として挙げられることから、親子を取り巻く環境が変化してきている現代においての職務の遂行には、職員の専門性はもちろんのこと、認識や態度などが重要となってくるだろう。そこで、前研究において調査した同様のボランティア志向性と向社会的行動を測る内容を質問紙調査で実施し、職員間での比較や先行の大学生調査の結果との比較検討から見られる、子どもの育ちを支える福祉分野の専門性について報告する。

2. 方 法

調査対象者は児童館職員 47 名とし、調査時期は 2016 年 3 月であった。質問紙配布前に調査趣旨を説明し、対象者の了承を得た上で実施した。質問紙調査についてはフェイスシートと 2 種類の質問紙からなり、回答方法については次に示す通りとした。1 つ目は本橋ら

(2003) が自らの研究のために作成した、ボランティア質問項目を使用した全 20 項目の質問に対して、自分の考えを「きわめてあてはまる」から「あてはまらない」までの 5 件法で回答してもらった (図 1-1)。なお、本橋らによる元の尺度名は「ボランティア質問項目」であるが、その内容から本研究においては「ボランティア志向性尺度」と命名して用いることにした。2 つ目は菊池 (1988) による向社会的行動尺度 (大学生版) 20 問で、回答方法は「いつもした」から「したことがない」までの 5 件法とした (図 1-2)。

【1】 次の項目についてあなたはこれまでの程度あてはまりますか。 自分にあてはまる程度 (1~5) に○をつけてください。					
	あてはまらない	少しあてはまる	わりとあてはまる	かなりあてはまる	きわめてあてはまる
〈 1 〉自分でイベントを企画することはやりがいがあると思う	1	2	3	4	5
〈 2 〉他人にゲームのルールを説明したりするのは好きだ	1	2	3	4	5
〈 3 〉自分の感じていることをみんなにわかるように説明するのが得意だ	1	2	3	4	5
〈 4 〉ボランティア活動は多くの内容があることを知っている	1	2	3	4	5
〈 5 〉誰もしなければならないときは自分から話題を提供できる	1	2	3	4	5
〈 6 〉初めてあった相手でもうまく話をあわせることができる	1	2	3	4	5
〈 7 〉世界の子どもたちがどんな状況か考えることがよくある	1	2	3	4	5
〈 8 〉小さな子どもにやさしい言葉を使って説明するのが得意だ	1	2	3	4	5
〈 9 〉みんなの意見をまとめ行動や企画の決定ができる	1	2	3	4	5
〈 10 〉ボランティア活動をする人たちは生き生きとしてよく感じる	1	2	3	4	5
〈 11 〉人と協力して物事を行うことが好きである	1	2	3	4	5
〈 12 〉自分の知識や技術を誰かに伝えたいと思う	1	2	3	4	5
〈 13 〉他の国で起きていることは自分にも関係があると感じることが多い	1	2	3	4	5
〈 14 〉みんなの前で自分の意見をはっきり言うことができる	1	2	3	4	5
〈 15 〉ボランティア活動を取り巻く課題について知っている	1	2	3	4	5
〈 16 〉自身の将来像について考えたことがある	1	2	3	4	5
〈 17 〉ボランティア活動は自分の成長に役立つと感じる	1	2	3	4	5
〈 18 〉自然を維持したり回復することは難しいことだと思う	1	2	3	4	5
〈 19 〉いろいろな人たちが一所懸命にボランティア活動をしていることをよく見る	1	2	3	4	5
〈 20 〉自分とは違う考えの人の意見を聞くことができる	1	2	3	4	5

図 1-1. ボランティア志向性尺度
(本橋ら, 2003 による)

【2】 次に挙げている様々な行動を、あなたはこれまでのどの程度したことがありますか。 自分にあてはまる程度 (1~5) に○をつけてください。					
	したことがない	一度したことがある	数回したことがある	しばしばしたことがある	いつもした
〈 1 〉列に並んでいて、急ぐ人のために順番をゆする	1	2	3	4	5
〈 2 〉お店で、渡されたおつりが多かった時、注意しあける	1	2	3	4	5
〈 3 〉ころん子どもを起こしてやる	1	2	3	4	5
〈 4 〉あまり親しくない友人にも自身のものを貸す	1	2	3	4	5
〈 5 〉気持ちの悪くなった友人を、介抱する	1	2	3	4	5
〈 6 〉友人の困っていることを手伝う	1	2	3	4	5
〈 7 〉列車などで相席になったお年寄の話し相手になる	1	2	3	4	5
〈 8 〉気持ちの落ち込んだ友人に電話したり、手紙を出したりする	1	2	3	4	5
〈 9 〉何か探している人には、こちらから声をかける	1	2	3	4	5
〈 10 〉バスや列車で、立っている人に席をゆする	1	2	3	4	5
〈 11 〉酒に酔った友人などの世話をする	1	2	3	4	5
〈 12 〉雨降りのとき、あまり親しくない友人でも傘に入れてやる	1	2	3	4	5
〈 13 〉欠勤や欠席した人のために、状況を教えたり世話をしたりする	1	2	3	4	5
〈 14 〉家族の誕生日などに、家に電話したりプレゼントしたりする	1	2	3	4	5
〈 15 〉あまり親しくない友人にも自分のものを貸す	1	2	3	4	5
〈 16 〉知らない人に頼まれて、カメラのシャッター押しをしてやる	1	2	3	4	5
〈 17 〉バスや列車で、他人の荷物を網棚にのせてあげる	1	2	3	4	5
〈 18 〉知らない人が落として散らばった荷物を、一緒に集めてあげる	1	2	3	4	5
〈 19 〉ケガ人や急病人が出たとき、介抱したり救急車を呼んだりする	1	2	3	4	5
〈 20 〉自動販売機や切符券売機などの使い方を知らない人に教えてあげる	1	2	3	4	5

図 1-2. 向社会的行動尺度
(菊池, 1988 による)

3. 結果と考察

対象者は 47 名 (男性 8 名、女性 39 名) であり、フェイスシートから年代と現在の労働状況 (職員種別) についてクロス集計を行った (表 1)。正規職員より契約やパート職員が多く、年代は 40 代と 50 代の職員が多かった。

表 1. 年代別の雇用形態別のクロス表

	正規職員	契約職員	パート職員	合計
20代	0	3	3	6
30代	2	3	2	7
40代	1	5	5	11
50代	3	3	10	16
60代	2	3	2	7
合計	8	17	22	47

(1) ボランティア志向性尺度 (20 問) の回答

「ボランティア志向性尺度」について、得られた回答から平均値を算出し、全体と性別、年代別、雇用形態別にそれぞれ示した (表 2)。全体的に見て、平均値が高い質問項目は問

児童館職員を対象とした向社会的行動に関する意識調査

10、11、17、18、19、20 であり、それらの質問項目に共通している内容から、ボランティア活動を実際に行っている様子やボランティアに対して肯定的な考えを持っていることが見て取れた。性別に関しては男女差 0.5 以上見られる質問項目に、年代別に関しては 2.0 以下と全体平均との差が 0.5 以上ある質問項目に、雇用形態別に関してはいずれか 0.5 以上の差がある質問項目に着目し網掛けで示した。

表 2. ボランティア志向性尺度の平均値（全体・性別・年代別・雇用形態別）

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	平均
性別	全体	2.81	2.43	2.09	2.96	2.81	3.04	2.51	2.81	2.62	3.19	3.26	2.96	2.94	2.59	2.23	2.94	3.17	3.21	3.17	3.60	2.87
	男性	2.75	2.38	2.63	3.00	2.88	2.50	2.38	3.25	2.75	2.88	3.00	3.25	2.75	2.75	2.50	2.38	3.13	3.13	2.88	3.25	2.82
	女性	2.82	2.44	1.97	2.95	2.79	3.15	2.54	2.72	2.59	3.26	3.31	2.90	2.97	2.55	2.18	3.05	3.18	3.23	3.23	3.67	2.88
年代別	20代	2.17	2.67	1.83	2.17	2.00	2.67	1.33	2.67	2.17	3.67	3.00	1.67	1.67	1.50	1.50	3.00	2.33	2.33	2.33	3.33	2.30
	30代	2.71	2.29	2.14	3.00	2.43	2.86	1.86	2.71	2.29	2.71	3.29	3.29	2.71	2.14	1.71	3.14	3.00	3.43	3.29	3.86	2.74
	40代	2.55	2.45	2.00	2.82	3.00	2.73	2.55	2.64	2.91	3.18	3.09	3.36	3.18	2.91	2.09	2.45	3.18	3.36	2.64	3.82	2.85
	50代	3.19	2.38	2.06	3.13	3.06	3.50	2.94	3.00	2.50	3.13	3.44	3.06	3.31	2.67	2.50	3.13	3.31	3.69	3.56	3.44	3.05
	60代	3.00	2.43	2.43	3.43	3.00	3.00	3.14	2.86	3.14	3.43	3.29	2.86	3.00	3.29	3.00	3.00	3.71	2.43	3.71	3.57	3.09
雇用形態別	正規職員	2.88	2.63	2.25	3.50	2.88	3.00	2.25	3.00	2.75	3.13	3.13	2.75	2.50	2.63	2.63	2.63	3.25	3.25	3.00	3.63	2.88
	契約職員	3.00	2.65	2.35	3.24	3.24	3.24	2.65	2.88	3.06	3.47	3.53	3.12	3.29	2.94	2.24	3.06	3.29	3.24	3.29	3.76	3.08
	パート	2.64	2.18	1.82	2.55	2.45	2.91	2.50	2.68	2.23	3.00	3.09	2.91	2.82	2.29	2.09	2.95	3.05	3.18	3.14	3.45	2.70

男女別の平均値をグラフで表し、図 2－1 に示した。男性が高い値である問 3、8 は、「説明すること」を共通としており、女性が高い値は多くの項目で見られるが、特に問 6 は大きな差が見られ「うまく話をあわせる」特徴が女性にあり、そのことが自身で把握できているということがうかがえた。

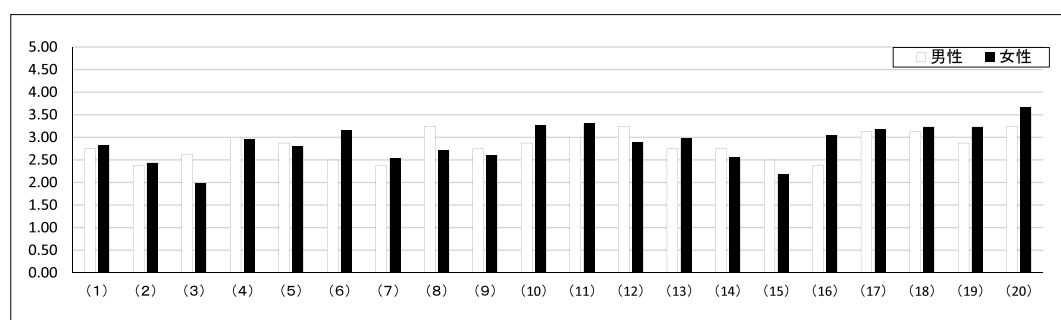


図 2－1. 質問項目毎の性別平均値

年代別の平均値をグラフで表し、図 2－2 に示した。20 代では、平均値が低い項目には説明をしたり意見を述べたりすることが共通しており、苦手であると捉えていることがよくわかった。逆に、ボランティアの内容としての知識や技術、状況の把握や言及などは年齢が高くなるにしたがって高い値を示していた。

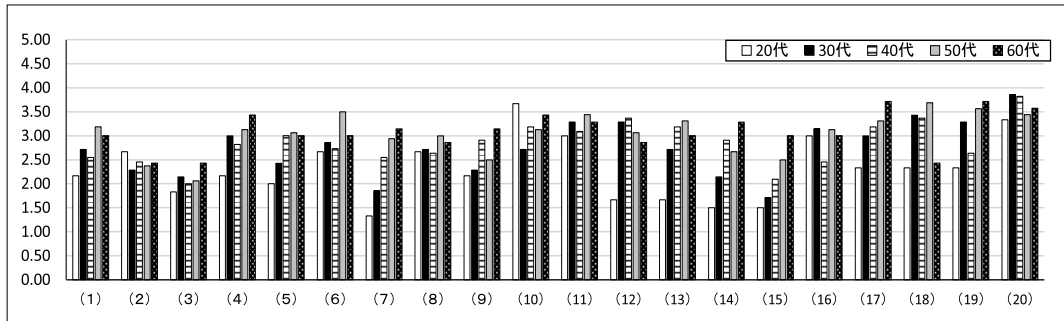


図2-2. 質問項目毎の年代別平均値

雇用形態別の平均値をグラフで表し、図2-3に示した。全体的に正規職員や契約職員の平均値が高かった。特に正規職員の高い値を示していた問4、15などの質問項目にあるボランティアの内容や課題については、日頃ボランティア活動に接している機会が多いため知識として自然に身につけているのであろうと思われた。

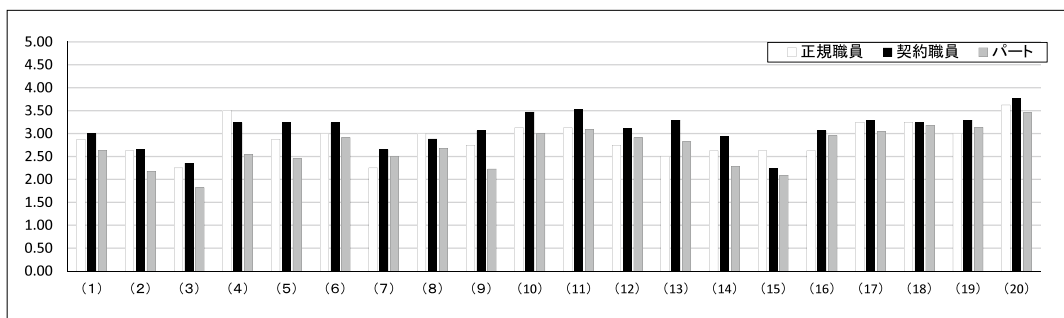


図2-3. 質問項目毎の雇用形態別平均値

(2) 向社会的行動尺度(20問)の回答

「向社会的行動尺度」について、得られた回答から平均値を算出し、全体と性別、年代別、雇用形態別にそれぞれ示した(表3)。全体的に高い値ではあるが、突出して平均値が高い質問項目は問2、3、5、6、14、16であった。ボランティア志向尺度と同様に、性別に関しては男女差0.5以上見られる質問項目に、年代別に関しては全体平均との差が0.5以上ある質問項目に、雇用形態別に関してはいずれか0.5以上の差がある質問項目に着目し網掛けで示した。特に男女別の差異については、全体の平均値においても各質問の平均値においても、女性の方が高い値を示している割合が多かった。これは、先行の学生調査比較においても保育者養成学生の男性よりも女性の方が高い平均値であったことなどから、現況も納得できる。

児童館職員を対象とした向社会的行動に関する意識調査

表3. 向社会的行動尺度の平均値（全体・性別・年代別・雇用形態別）

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)	平均
性別	全体	3.19	3.64	3.60	3.00	3.51	3.91	3.30	3.36	3.09	3.36	2.77	2.72	3.36	4.11	2.93	3.96	2.66	3.30	2.83	2.83	3.27
	男性	2.88	4.00	3.75	2.50	3.38	3.63	2.50	3.00	2.75	3.50	3.38	2.25	3.00	3.13	2.00	3.75	3.00	3.00	3.00	2.88	3.06
	女性	3.26	3.56	3.57	3.10	3.54	3.97	3.46	3.44	3.15	3.33	2.64	2.82	3.44	4.31	3.13	4.00	2.59	3.36	2.79	2.82	3.31
年代別	20代	3.00	3.00	4.00	3.83	3.17	4.00	3.17	2.83	2.83	3.17	2.83	2.33	3.17	3.83	3.50	3.83	1.67	2.67	2.33	1.83	3.05
	30代	3.00	3.71	3.86	2.71	4.43	4.57	3.71	3.57	3.14	3.14	3.43	2.71	3.71	4.14	2.43	4.43	2.57	3.43	3.43	3.71	3.49
	40代	3.09	3.27	3.27	2.73	3.00	3.91	3.18	3.36	3.09	3.18	2.55	2.27	3.09	4.45	3.09	3.91	2.36	3.36	2.18	2.09	3.07
	50代	3.44	3.94	3.57	3.06	3.63	3.75	3.38	3.56	3.13	3.56	2.56	3.06	3.44	4.13	3.00	4.06	3.00	3.50	3.06	3.13	3.40
	60代	3.14	4.00	3.57	2.86	3.43	3.57	3.00	3.14	3.14	3.57	2.86	3.00	3.43	3.71	2.50	3.43	3.29	3.14	3.14	3.29	3.27
雇用形態別	正規職員	3.00	4.25	3.43	2.50	4.00	3.75	3.13	3.75	2.75	3.50	3.13	2.75	3.75	3.75	2.25	3.75	2.75	3.63	3.38	2.75	3.30
	契約職員	3.18	3.59	3.69	3.35	3.65	4.18	3.65	3.29	3.59	3.41	3.06	3.06	3.29	4.06	3.31	4.24	2.88	3.47	3.12	2.76	3.44
	パート	3.27	3.45	3.59	2.91	3.23	3.77	3.09	3.27	2.82	3.27	2.41	2.45	3.27	4.27	2.91	3.82	2.45	3.05	2.41	2.91	3.13

男女別の平均値をグラフで表し、図3-1に示した。問14は親しい友人同士の関係を、問4、7、15は親しくない人との関係を表していたが、いずれにおいても男性よりも女性が高い値であったことから、女性の社会性や社交性などがうかがえた。中でも問7 ($t=2.41$, $df=45$, $p<.05$)、問14 ($t=2.92$, $df=45$, $p<.01$)、問15 ($t=2.84$, $df=44$, $p<.01$) の3つの質問項目においては、有意差が見られた。その他、全体的に女性の方が高い平均値であったが、男性の方が高い値を示した問11と17に関しては、介抱することや荷物を持ち上げることなど、体力的な要素も含まれるであろう。

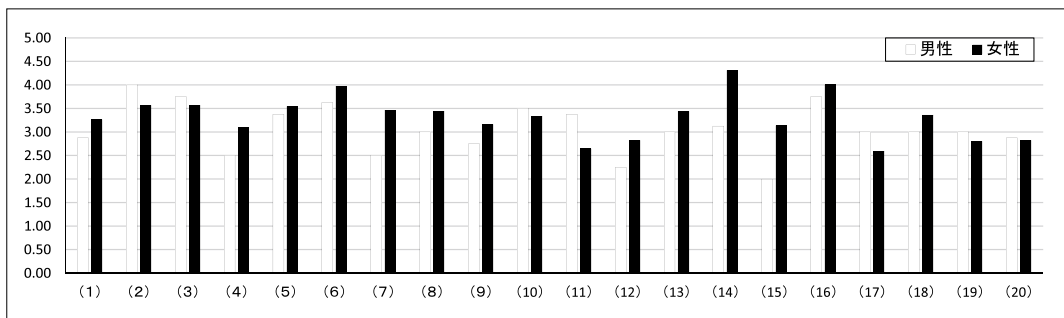


図3-1. 質問項目毎の性別平均値

年代別の平均値をグラフで表し、図3-2に示した。30代では、問5、6、11、13の4つの質問項目において、他の年代とは異なる高い値を表しており、これらの共通点として、親しい人や友人を対象とした援助行動であるため、対象によって行動を変えているということも考えられる。また20代では、問12、17、18、19、20の5つの質問項目において、他の年代とは異なる低い値を表しており、これらが親しくない人や見知らぬ人を対象とした援助行動であった。そして40代以降は突出した差が見られなかったことから、社会での

様々な経験を経て、社会性や援助行動などが身についていくのであらうとも推測できた。

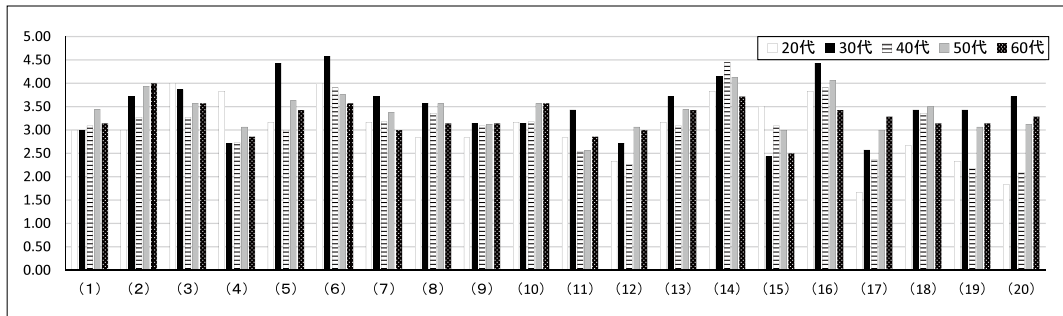


図3－2. 質問項目毎の年代別平均値

雇用形態別の平均値をグラフで表し、図3－3に示した。正規職員の高い値を示していた問2、8、13の質問項目については、相手を心配したり注意したりといった日々の業務上、不可欠であろう内容であるとも思われた。逆に、パート職員の低い値を示していた問5、11、12、17、18の質問項目については、世話をするような内容が多く、それらの頻度が低いことを表しているとも推測できた。

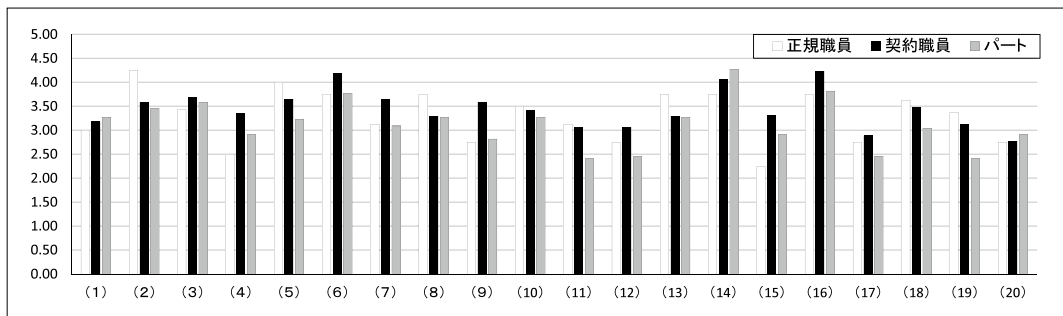


図3－3. 質問項目毎の雇用形態別平均値

(3) 各質問項目の相関

ボランティア志向性尺度と向社会的行動尺度との関連を表4に示す。男女ともに、各質問項目において、関連性が見られ、ボランティア志向性が高いほど、向社会的行動をとることが明らかであった。

表4. 男女別の相関係数

	向社会的行動尺度（男性）	向社会的行動尺度（女性）
ボランティア志向性尺度	.809 *	.434 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

(4) 先行の学生調査との比較

筆者が前研究として、同質問紙調査を行った学生 127 名（男子学生 59 名、女子学生 68 名、平均年齢 19.96 歳）の結果と、今回の児童館職員 47 名との平均値の比較を行った。t 検定の結果について、表 5-1 にはボランティア志向性尺度の平均値の差を、表 5-2 には向社会的行動尺度の平均値の差を示した。なお、有意差が見られた質問項目において、平均値が高い方を網掛けで示した。

ボランティア志向性尺度において、有意差が見られた項目のうち職員の方が高かった質問項目は、問 11、17、19、20 であった。これらの結果から、ボランティアに関して学生よりも職員の方がより、他の人と協力しながら活動することや自分とは異なる考えや意見を聞きながら行動することができ、そしてそれらが自分の成長に役立つと捉えているということが明らかとなった。また向社会的行動尺度において、有意差が見られた項目のうち職員の方が高かった質問項目は、問 1、2、3、5、6、7、9、13、14、15、16 であった。これらの結果から、大学生よりも児童館職員の方が、援助対象が非常に親しい人でなくても行動を起こしているということが理解でき、そうした能力は日常的に周囲で起こる些細な事柄にも目を配り、状況を認識しているからこそ行動できるとも言えるだろう。これは、人と関わる職業であればより重要なことであり、児童館内において子どもの育ちを支えるための環境作りをはじめ対人関係や高い社会性を必要とする職員の実態を把握することができた。

表 5-1. 同調査における学生平均値と職員平均値の差

	学生		職員		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
(1)	2.60	1.05	2.81	1.26	1.11
(2)	2.93	1.35	2.43	1.04	2.31 *
(3)	3.10	1.27	2.09	0.93	4.96 ***
(4)	3.07	1.20	2.96	1.23	0.55
(5)	3.29	1.20	2.81	1.21	2.35 *
(6)	3.65	1.01	3.04	1.14	3.42 **
(7)	2.69	1.26	2.51	1.20	0.85
(8)	3.14	1.22	2.81	0.99	1.68
(9)	2.72	1.08	2.62	1.09	0.58
(10)	3.15	1.08	3.19	1.14	0.22
(11)	2.74	1.22	3.26	0.92	2.99 *
(12)	2.59	1.23	2.96	1.22	1.75
(13)	2.93	1.18	2.94	1.34	0.03
(14)	3.50	1.21	2.59	1.22	4.34 ***
(15)	3.53	1.03	2.23	1.07	7.28 ***
(16)	3.73	1.03	2.94	0.99	4.56 ***
(17)	2.27	1.31	3.17	1.07	4.29 ***
(18)	3.24	1.16	3.21	1.12	0.16
(19)	2.69	1.35	3.17	1.15	2.19 *
(20)	2.76	1.31	3.60	0.85	4.93 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 5-2. 同調査における学生平均値と職員平均値の差

	学生		職員		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
(1)	3.00	1.20	3.19	0.82	1.19 **
(2)	2.37	1.10	3.64	1.19	6.63 ***
(3)	2.24	1.00	3.60	1.01	7.83 ***
(4)	2.94	1.18	3.00	1.18	0.28
(5)	2.59	1.02	3.51	1.25	4.97 ***
(6)	2.66	1.04	3.91	0.80	8.40 *
(7)	2.42	1.07	3.30	1.08	4.79 ***
(8)	3.10	1.15	3.36	1.07	1.38
(9)	2.52	1.13	3.09	1.12	2.96 **
(10)	3.14	1.09	3.36	0.90	1.23
(11)	3.31	1.08	2.77	1.22	2.83 **
(12)	2.65	1.06	2.72	1.23	0.38
(13)	2.71	0.98	3.36	0.94	3.95 ***
(14)	2.74	1.09	4.11	1.13	7.28 ***
(15)	2.15	0.85	2.93	1.10	4.93 ***
(16)	3.38	1.22	3.96	0.93	3.31 *
(17)	3.12	1.15	2.66	1.15	2.34 *
(18)	3.33	1.07	3.30	0.91	0.20
(19)	2.93	1.10	2.83	1.37	0.44 *
(20)	3.41	1.04	2.83	1.22	3.13 **

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

4. まとめ

本調査報告は、児童館職員を対象としたボランティア志向性尺度と向社会的行動尺度を質問紙調査によって測り、その結果を性別、年代別、雇用形態別のそれぞれの視点から検討した。わずかではあるが、それぞれ年代が上がることで経験値が高まり援助知識や技術が習得されていることや、雇用形態においても正規職員であれば認識の高まりや責任感からくる意識や態度をうかがい知ることができた。また、先行の大学生を対象とした同調査との比較を行うことにより、職員においては、被援助者との関係が親しいかどうかにかかわらず、ボランティア意識や向社会的行動の高いことも認められた。これらのように、子どもの心身の健やかな発達に大きく影響を及ぼす、児童館職員の高い資質を認識することができた。

謝 辞

本調査を行うにあたり、快くご協力くださいました47名の児童館職員の方々に、改めて御礼申しあげます。

【引用文献】

- 荒川裕美子・保住芳美・吉田浩子（2006）「小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連」川崎医療福祉学会誌第16巻第1号，pp.133-139
- 荒川裕美子・吉田浩子・保住芳美（2008）「大学生の『ボランティア』に対する認識－医療福祉を学ぶ大学生を対象とした調査から－」川崎医療福祉学会誌第18巻第1号，pp.203-211
- 堀 洋道・吉田富二雄（2005）『心理測定尺度集Ⅱ』，pp.178-182「向社会的行動尺度」
- 菊池章夫（1988）『思いやりを科学する－向社会的行動の心理とスキル』川島書店
- 本橋 彰・谷井淳一（2003）「中学生対象のボランティア学習プログラムに関する実践的研究」国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要第3巻，pp.83-95
- 大日方重利・藤重育子（2017）「保育専攻生のボランティア志向性と向社会的行動について」大阪聖徳保育・福祉論叢，現在印刷中
- 岡鼻千尋（2013）「ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響」心理科学第34巻第2号，pp.68-76
- 太田直美・米澤好史（2012）「大学生の向社会的行動と友人関係及び自己像の形成との関連」和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要第22巻，pp.29-39
- 谷田（松崎）勇人（2015）「大学生の地域社会への責任尺度の作成」日本教育工学会論文誌第39巻第1号，pp.31-40
- 井手祐太・菅 千索（2015）「家族関係が子どもの向社会的行動に及ぼす影響について」和歌山大学教育学部紀要教育科学第65巻，pp.71-76

